

季語になる

村上 豊

高橋睦郎著『歳時記百話』（中公新書）に「三・一一忌」がある。

高橋氏のペンは「国民全体にとって今もまだ現在進行形といえる平成二十三年三月十一日の東日本大震災による忌日も当然これに加わろう。」

著者が指す「これ」というのは、「原爆忌」「敗戦忌」等をいう。「これを何と呼べばいいか。とりあえずは三・一一忌、東日本忌、等二つ三つ並べた挙句、「どれももう一つしっくりこないのは、現在進行形のせいもある。」

この詩人によって、三・一一にふさわしいぴったりする忌名もいずれ定るか。  
宮城県在住の俳人の高野ムツオの例句

四肢へ地震ただ轟轟と轟轟と

短歌は『変わらない空、泣きながら笑いながら』等、大震災、大津波を歌った本が続々出版されているようで、東直子氏の短歌時評（朝日新聞）に「東日本大震災を経験した五十五人の日本人を著者とする」は、（歌集名は先出）震災直後から昨年九月までに詠まれた震災短歌をまとめたものである。「これらの歌は、（日本からの声）展覧会で米国に渡った。そこでの英訳が全ての歌に添えられている」とあり、米国の高校生の読後感も紹介されているが、詳しくないので、ここに全文を紹介すると

「短歌を読むことは災害を経験する人とつながるためにすごく良い道具です。ぼくは、この短歌を読み、かなしいけれど、のぞみを持つことができました。がんばってください。ありがとうございました。」

マックス・ルートン君という高校生。

「災害を経験する人とつながるためのすごく良い道具」は微笑を誘う。

方法とか手段とか言いたかったのだろう。

日本人は災害なんて経験したいと思わないよ、だが、今度の大地震は「絆」の大切さを真実教えられたよ。

又、助け合うことはもちろん大切なことだが、災害に遭った時は自分自身を守ることが一番大事なこともね。

歌集では福島県の婦人が十二首、同県の婦人（別人）九首、岩手県の婦人が五首、「橄欖」の三船武子氏が四首、写真や本人のコメント（大震災遭遇当時の）がある。

本の帯は「ニューヨークの人びとが泣いた3・11 心の一行ドキュメント！」

編集人辻本勇夫氏のあとがきは「私は三月末、長い海外勤務を終えて大震災直後の日本に帰国したばかりでしたので、これらの短歌から、震災を経験した人びとの気持ちに初めて接することができました。『万葉集』以来千四百年の伝統が今も生きていて、日本人は短歌と言う形式に寄り添いながら、歌わずにいられない心を歌い始めたのです。」と。

襲いくる津波の中に町一つ悲鳴聞こえず吞まれてゆけり	山本憲二郎
震度6強の実家に父母はいる呼び出し音十回十一回応えぬ恐怖	菊池 陽
出張中に津波に吞まれ無言にて戻りし人の通夜冴え返る	藤森 正則
水求め五時間並ぶ雪の空見知らぬ同士で傘さしかけつ	大宮 徳男
十月 <sup>とつき</sup> 経ていまだ不明 <sup>つま</sup> の夫を死と認めて従妹ふるさとを去る	三船 武子

東直子氏は「あの時」を読者に迫体験させる。と書く。だが被災者は？ あの恐怖や苦労を？ ま、前向きに行くしかないが。

筆者：橄欖同人